魔法少女リリカルなのは　～道化の踊る狂騒曲～

岡崎結弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～道化の踊る狂騒曲～

【Ｎコード】
Ｎ４６１５Ｏ

【作者名】
岡崎結弦

【あらすじ】
Ｊ．Ｓ．事件から二年……
世界最大の監獄から出た男、ラヴィ。
その彼が担当することとなった厄介な事件。
彼はその事件を通して、様々な人達と会うことになる。

果たして、事件が終わった時、彼に待っているのは、希望か、絶望か……

第一話　見返りを求める奴は親友ではなく悪友（前書き）

後半部分を書き直してみました？

それではどぞっ！

第一話　見返りを求める奴は親友ではなく悪友

第三十五隔離管理世界特殊移動違法犯罪留置場、次元世界最大の監獄、通称『次元の檻』。

ここにいるのは、全次元世界で、Ｓランク以上の事件を起こした犯罪者ばかりだ。

囚人達は皆、一癖も二癖もありそうな人間ばかり。

隙あらばいつ逃げ出すかもわからないという巣窟。

決してそんなことはできはしないのだが、それでもやらずにはいられない。

そんな狂った連中の中でも、異質の空気を纏ったものがいた。

「……」

そいつは、囚人にも関わらず、頭には金鈷、左の耳には二つの銀のピアスをしており、両腕を鎖でがんじがらめに巻かれているという、この上ないくらいの異彩を放っていた。

そんな彼がしていることは……

「眠ぃ……ぐー」

ただ、寝ているだけだった。

ここに連れてこられて早八年。

時間ってのは過ぎるのが早いねぇ。

毎日毎日、悲鳴やら歓声やら怒声やらが聞こえて、何にもない無機質な石の壁を見て過ごし、ンで眠くなったら寝る。

そんな暮らしも、もぅ八年になるんだなぁ。

早いもんだ。うん。

ここ最近は、結構慌ただしかったしなぁ。

前に来たジェイル・スカリエッティだったけ？

何かそいつがとんでもないことして、ミッドが終わりかけたとか……

その時の囚人の騒ぎっぷりは凄かった。

もぅカジノでフィーバー起こしてる奴並にテンションが高かったようん。

おかげでうるさいったらありゃしないかったよ全く。

僕は寝転んでる体勢から起き上がり、壁にもたれかかって天井を仰

ぎ見た。

そこからは、水がポチョン、ポチョン、と落ち続けている。

この鎖のせいで、僕の行動の範囲は、普通よりも少ない。

精々ボケーっと牢屋の外や天井や壁を見るくらい。

ホント、退屈だよなぁ。

まぁ、不満に思ったことは一度もないけどね。

ここって好きなだけ寝れるしね～。

僕、ここで一生過ごすんだ。

「ーーー。面会だ。出ろ」

うぇー。最悪……

僕は嫌々立ち上がり、看守についていく。

周りにはかつて巷を騒がしたことのある犯罪者ばかり。そんな奴らが僕にブーイングを送ってくる。

まぁ、こんな場所じゃ、退屈しのぎになるのさんざ、面会か新人いびり、あるいは、脱獄に失敗した奴を笑うくらいだからな。

人の死を笑える奴ら……

本当にクズばっかだよなぁ、ここ。

まぁ、その筆頭は僕だけど。

看守に連れられ、エレベーターに乗り込む。

僕のいるエリアは、地下八階。“次元の檻”の中でも、最も危険だと判断されたものが行くエリアだ。

大抵は大量殺人が原因だ。

しっかし、こうして改めて他の階見ると、広いよなぁ。

僕のエリアは、危険すぎる奴しかいないせいか、普通より囚人の数が少ない。

まぁ、危険度はぶっ千切り一位だろうがな。

エレベーターが止まり、しばらく歩き、一つのドアの前で立ち止まる。

「入れ」

言われた通り入る。

中には、予想どおりの奴がいた。

「ヘロー、クロスケくん。元気かい？」

「君の声を聞いた瞬間萎えたよ。後、僕の名前はクロノだ」

ガラス越しにこちらに向かって声を発したのは、僕の十年来……くらいだったかな？……の悪友、クロノ・ハラオウンがいた。

「まぁ取り敢えず、結婚おめっとさん」

「それは前来た時に聞いたし、その前もその前もその前も何度も聞いた」

「忘れたな。そんな昔のことは」

「君の脳のキャパの限界を超えていたか。それはこちらの思慮が足らなかったな。すまん」

「いやいや。提督ともあろう方が、わざわざこんな場所に来るなんて、よっぽど暇で仕方ないんでしょうから、僕と会うのを大層楽しみにしていたと考えると、自分のことを誇りに思えますので」

「そんな妄想をするほど心が病んでいたとは、さすがに予想しなかったよ。今度は医者と一緒に来るから安心しなよ」

「成る程。そのお医者様と提督と僕で、楽しいトークがしたいと。しかし僕はそんな茶番をするくらいなら寝ていたほうがマシですので、今から戻って寝ていいですかね？」

「構わないが、明日君の首と胴体が離婚してるかもしれないぞ？」

「それはそれは。愉快なことになりそうで楽しみだよ全く」

「僕も見てみたいことこの上ないんだが、今日はまた別の用事があ

ってね。残念ながら日を改めるとしよう」

「そうですか。それは残念だなぁ」

「……そろそろ本題に入っていいか？」

「やだ眠い帰りたい」

「話だが……」

「無視か。前から思ってたけど、お前って本当に管理局員？」

「うるさい。それより、君、ここから出る気はないか？」

「ない」

「……即答か」

「わかってんだろお前も。“そんなことは何時でも出来るんだ”」

「脱獄しろと言ってるんじゃない。違法だが、ここから出て、全く新しい人間として過ごす気はないか？」

「ない」

「少しは考えろよ……」

「考えるまでもない。僕はここの生活に満足してるんだ。もうシャバには興味ないよ」

「……“レイヴン”」
「っ！？」
「……出る気になったか？」
「……詳しく聞かせてもらおうか？」
「奴が、また現れる可能性がある」
「根拠は？」
「聖王教会の、カリム・グラシアさんの予言に出たんだ」
「予言？確かあれは占い程度なんだろ？」
「だが、“０”ではない」
「……」
「出る気にはなったか？」
「……目的は？」
「話が早くて助かる。まぁ、単純に手伝ってもらいたいことがあってね」
そう言って、クロノがいくつかの書類を渡してくる。
「君の罪は、質量兵器の保持及び開発、そして……」

「大量虐殺、だろ？」

「……あぁ。そうだ」

「そんな人殺しの化け物を解放ーー「君は化け物じゃないっ！」ーーうるさいなぁ。セリフの途中だぞ？」

「うるさくもなるさ。悪友とはいえ、友がそんなことを言ったらな」

「うわっ、寒っ！」

「僕も言って後悔した」

「てか、僕は化け物だろ？どう考えてもさ」

「だからっーー」

「あーはいはい。化け物じゃなーい化け物じゃなーい」

「お前なぁ……それに君がここに入ったのだって全部ーー」

「クロノ、ストップ」

「っ！？」

「何大声で極秘事項叫ぼうとしてんだよ。消されたいのか？」

「……すまない」

「別にいいけどね～。で、手伝ってもらいたいことって？」
「書類にも書いてあるんだが、少し厄介なことがあってな」
書類を見てみる。
これって……
「質量兵器を何者かが、裏の連中に引き渡しているようなんだ」
「密売じゃないのか？」
「ああ。目的は不明。正体も不明。行動するときは常に顔を隠している」
「……管理局の捜査網には引っ掛からないのか？」
「全くだ」
「……で、この連中ひっとらえる為に、わざわざ上層部と掛け合って、僕を釈放する段階までもって来たってわけか」
「ああ、そうだ。連中は魔導師でもあるらしくてな。しかもランクは全員がオーバーSクラスは確実かもしれない」
「だから人手不足の管理局としては、例え人殺しの化け物だろうが、猫の手を頼るような気分で頼る、と」
「もしこの事を受けてくれるなら、上はもうお前には一切干渉しないと言っている」

「ふーん……断ったら？」

「首と胴体が離婚だ」

そりゃ大変だ。

でも……

「別にそれもいいかな～。死ぬのは恐くないしね」

「お前っ……」

「それよりも恐いこと。お前なら、わかるよね？」

「……」

「だからこの話はーー「レイヴンはどうするんだ？」ーーあいつが現れるのは、あくまで“かも”だろ？」

「ああ。だが、君が動く理由としては、充分だと思うが？」

「……そこまでして僕を出したい？」

「ああ。出したいね。出して仕事を山ほど押しつけたい」

「悪魔かよ……まぁでも、退屈はしなさそうだな」

「っ！じゃあ……」

「しゃーないから、こき使われてやるよ、悪友」

こうして僕は、第二の人生を歩むことになった。

第一話　見返りを求める奴は親友ではなく悪友（後書き）

感想待ってますっ！

第二話　シャバの空気は変わらない　まぁ忘れてるんだけど……

じゃらじゃら

鎖の落ちる無機質な音が、監獄の中に響き渡る。

試しに肩を回してみる。

うわっ！大分なまってんなぁ……

囚人につけられる首輪を外され、どこかの部屋に入れられる。

その部屋の真ん中には、一つの椅子とその上に僕がこれから必要なものが置いていた。

まず管理局の制服、次に偽装ＩＤカード。

あいつも黒くなったなぁ。

取り敢えずそれだけあったので、制服に着替え、ＩＤカードをポケットにしまう。

さぁて。久しぶりのシャバだぜぇ……

◇◇◇

「ほれ」

監獄から出て、今はミッドチルダ行きの艦船に乗っており、その部屋の一室で、クロノから一枚の書類を受け取る。

「君のこれからの立ち位置だ」

ラヴィ・ビット二等空尉。年齢２０。出身世界第一管理ミッドチルダ北西部。役職、執務官補佐。魔導師ランクＡＡ。

「魔力はリミッターで抑えさせてもらう」

リミッターは、僕の左腕の腕輪だ。

「どれくらい？」

「ＡＡ＋だ」

４ランクダウンか……まぁ問題ないな。

「で、誰の補佐になるの？どうせお前の身近な人なんだろうけど」

「僕の妹だ」

「成る程。僕はこれから腹黒女の部下になるのか」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味だ」
「君の休暇は3ヶ月先でいいか？」
「仕事さぼるからモウマンタイ」
「何故中国語？」
「知ってんのかよ……」
地球って意外と有名？
「にしてもラヴィって……ほとんど前と一緒じゃん」
「そのほうがいいと思ったんだが？」
「まぁ、別にいいけど……」
しかし、これから任務に行くとき、武器がなくては困るよなぁ～。
「なぁ。デバイス研究室ってどこ？」
「？どうした？」
「いやさ、流石の僕も丸腰で事件に挑む勇気はないよ？」
「それなら心配するな。ほれ」
クロノが、黒と銀の、十字架の形をしたピアスを投げてきた。

「……マジで？」

「マジだ」

この２つのピアスは、僕の専用デバイスだったものだ。てっきり解体処分されているものだとばかりに……

「しっかし、生きてやがったのかー。残念」

［マスター。もう少しくらい再会を喜ぼうとか思いません？］

白いピアス、シファーが抗議の声をあげる。シファーはインテリジェントデバイス、黒い十字架のイーグルは、ＡＩの搭載していないアームドデバイスだ。

「え、何で？」

［いや普通にわかるでしょっ！］

「え～？僕わかんないな～」

［このっ……］

「やめろシファー。こいつ相手にそんなことを言っても、虚しいだけだ」

「いや～」

「［褒めてないぞ（ませんよ）］」

「あっそっ。まぁ取り敢えず受け取っておくよ。でもやっぱり今の技術に合わしたのに改造したいから教えといて」

「わかった。研究室は……だ。ミッドチルダに着くまで少ししかないが、完成するのか？」

「カートリッジシステム加えるだけだからすぐだよ」

そう言って、立ち上がり部屋を出る。

さ～～って。久しぶりの改造だぁっ！！

◇◇◇

「ふぅ。出来た出来た」

［早っ！］

「いやだってちょっとした改造だぞ？すぐ終わるに決まってんじゃん」

右耳にシファー、左耳にイーグルをつける。

「もうすぐミッドにつくだろうし、そろそろクロスケのとこに戻るかな」

「そうしましょう」

◇◇◇

「ふぅん。ここって全然変わんないのね」

艦船から眼下の街並みを見て、そう呟く。

「変わった部分だってあるさ。いろいろ」

「例えば？」

「さぁ？僕は基本船の中だからわからん」

「お前に聞いた僕が馬鹿だったよ」

船から降り、そのまま転送ポートの前まで行く。

「任務の間の拠点は、この転送ポートの先になる。君にはこれから、僕の妹に挨拶に行ってもらう」

「お前は？」

「これでも一応提督なんでな。忙しいんだ」

「へー。じゃあ行ってくるよ」

「ああ。じゃあな」

転送ポートに入り、クロノの方を向く。

「じゃあね～。シスコン提督」

「なっ、おまっーー」

クロノが何か言う前に、僕は転送された。

◇◇◇

え～っと……どうやって行けばいいんだ？

現在僕は迷子街道まっしぐら。自分がどこにいるのか全くわからな～い＆目的地がわからな～い。

シスコンの奴何で場所を教えないんだよっ！

おっ、あそこにいる女性に聞こ。

「あの～、すみません～」

「あ、はい何でしょう？」

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官殿がどこにいるか分かりますか？」

「あっ、はい。フェイト執務官は……」

ふむふむ。成る程成る程。

「わかりました。ありがとうございます」

「いえいえ。それでは」

さて、行くか。

◇◇◇

「ここか……」

一つのドアの前に立ち止まる。

う～ん。少～し緊張してきたかもしれない。

［ややこしいですね］

うるさい。

取り敢えず、二回ノック。これ基本。

コンコン

「あっ、今出ますー」

中から女の人の声。

さて、あのクロノの妹だ。一体どんなゲテモノが……

ガチャ

「どちら様ですかー？」

中から出てきたのは、綺麗な金髪の赤い瞳の美人さんが出てきた。

……妹？この人があれの？

いやいや～。ないない。

「いきなりですみませんが、フェイト執務官殿で間違いでしょうか？」

「あ、はい。そうですけど……」

……うっそーん。

似てなさすぎだろ……

「すみません。自分はラヴィ・ビットと言います」

「あっ、あなたがそうなんですか。話はクロノから聞いてます」

「どんな誉め言葉を？」

「毎日昼寝をして、そのせいで何人もの犯人を取り逃がし、アラートが鳴っていても寝続けて、何度も降格されたけど、実力だけは確かだから何とか執務官補佐の座までのぼりつめたと聞いてます」

ピキッ

僕の中で、何かが壊れる音が聞こえた。

よし、今からあのシスコンを潰しに行こう。

「素晴らしい誉め言葉ですね」

「これが？」

「ええ。そうですよ。それと、僕は少々用事が出来たので、挨拶は後でいいでしょうか？」

「あ、クロノから言われてるんですよ。『あいつは必ず僕の所に戻ろうとするから、絶対に引き止めろ』って」

ちぃっ！ホントに根回しがいいなあのシスコンッ！！

くそ。この人も絶対逃がしてくれそうにないよ。

仕方ない。諦めるか。

「改めまして、僕の名前はラヴィ・ビットです。あなたの補佐としてここに呼ばれました。よろしくお願いします」

「フェイト・T・ハラオウンです。よろしくお願いします、ラヴィ執務官補佐」

「僕はあなたの部下の上年下なんですから、敬語は止めてください」

「あ、ならラヴィも敬語じゃなくていいよ？」

「これが僕の喋り方なので、気にしないでください。ハラオウン執務官」

「そうなんだ。あ、私のことはフェイトでいいよ」

「わかりましたフェイトさん」

「じゃあ、取り敢えず中に入ろうか」

「そうですね」

はぁ〜〜〜〜。

あのシスコン覚えてろよホント……

第二話　シャバの空気は変わらない　まぁ忘れてるんだけど……（後書き）

感想待ってますっ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4615o/

魔法少女リリカルなのは　～道化の踊る狂騒曲～

2010年10月29日20時30分発行